

隨泉寺寺報

平成 26 年 (2014 年) 3 月号 第 523 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

春季彼岸会法座

講師 正楽寺住職 原田有浄師 講題

『幸せになるとき』



■【「彼岸」(ひがん)】～お悟りの世界(お浄土)を思うとき～

「彼岸」はサンスクリット語の「波羅密多」から来たものといわれ、煩惱と迷いの世界である【此岸(しがん)】にある者が、「六波羅蜜」(ろくはらみつ)の修行をする事で「悟りの世界」すなわち【「彼岸」(ひがん)】の境地へ到達することが出来るというものです。

1052年に仏の教えが消滅してしまう”という「末法思想」が広まり、社会現象になり始めました。現世で報われないのなら、せめて死んでから極楽浄土へいけるようにとすがるようになりました。



仏教の教えには、何でもほどほどが良いという「中道」という考え方があります。その考えと合致して出来たのが「彼岸」だといわれています。春分と秋分の日には昼夜の長さが同じになります。また、暑くも寒くもないほどほどの季節であり、

太陽が真西に沈む時期なので西方極楽浄土におられる阿弥陀仏を礼拝するのにふさわしいという考えから、次第に人々の生活に浄土をしのぶ日、また彼岸に居られる祖先をしのぶ日として定着していったようです。

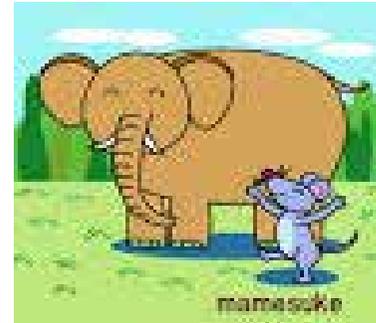
3月の法座予定

- 3月 2日 本部役員会
- 3月 9日 掃除 瀬野川団地・桑原
- 3月 15日 朝席午前10時より 春季彼岸会法座 おとき
- 3月 15日 昼席午後1時より 春季彼岸会法座
- 3月 15日 昼席終わり次第 婦人部新旧役員会
- 4月 2日 午後4時より 門信徒会本部役員会 引き続き花見

☆ なんと時間のたつのは速いことか

1月はいる、2月はにげる、3月はさる、といいますが、この間お正月と思っていましたが、もう3月です。なんと時間のたつのは早いことでしょうか。子供のときと歳を経たときでは時間のたつのが違う気がします。

考えてみると、当たり前のことで、孫の晃樹はこの間ちょうど1歳を迎えました。



私はもうすぐ64歳になろうとしています。孫の一年は一生を生きた時間ですから、一年は長く感じます。しかし、私の一年は一生の1/64ですから、比較するとあっという間です。早く感じるのは当然です。

目からウロコが落ちる本というのは、いろいろありますが、『ゾウの時間 ネズミの時間』を読んだときは、かなりデカイウロコが落ちた気がします。

我々はどんな動物にも同じ時間が流れていると思い込んできましたが、実はそうではなく、動物のサイズが変われば時間も変わるということを、著者は具体的に示しています。

時間の単 一つではなく、ゾウにはゾウの、人間には人間の、ネズミにはネズミの時間がある、というわけです。「哺乳類ではどの動物でも一生の間に20億回心臓を打つ。心臓の拍動を時計として考えるなら、ゾウもネズミも同じ長さだけ生きて死 ことになるだろう。」唯一不変の時間でさえも、生物によって異なるという世界観は、人間の常識を疑うきっかけを与えてくれました。

また、楽しい時間は早く感じるけれども、苦しい時間は長く感じます。蓮如上人は、人間の五十年は四王天の一日一夜にあたり、四王天の五十年は等活地獄の一日一夜だと仰っています。四王天は持国天とか多聞天とか、この世の人々をお守りくださる神様です。親鸞聖人は『正像末和讃』に、仏法に会いながら、本願を信じきれない自力称名の人が、疑いの罪で極楽世界の辺地にある七宝の宮殿に五百歳の間 閉じ込められて、諸々の厄を受けると説かれています。天人の定業は人間の十倍 五百年だが、傲慢辺地でもろもろの厄を受けねばならない。お念仏は地獄へ落ちる私が、一足飛びにお浄土に参らせていただく不思議です。 聖人のみ後を慕って、お念仏申させていたしまししょう。

☆御礼

- 永代経懇志 金 拾萬円 休場 喜志江殿 故 休場 修様 特 永代経志として
- 永代経懇志 金 拾萬円 馬場 陽子殿 故 馬場 武義様 特 永代経志として
- 永代経懇志 金 拾萬円 前座 秀美殿 故 前座 久生様 特 永代経志として

☆御礼

- 門信徒会へ 金 一封 馬場 陽子殿 故 馬場 武義様 香典返しとして
- 門信徒会へ 金 一封 前座 秀美殿 故 前座 久生様 香典返しとして

☆浄土真宗本願寺派門主 大谷光真著 「あけぼのすぎ」

-- 浄土真宗一口法話 --3月

「かぎりない智慧と慈悲こそ仏の本質である」

(瓜生津隆真)

二月も末となり、寒い時もありますが、日差しは春が近いことを知らせてくれます。植物が成長を進めるだけでなく、私たち人間も、なんとなく、体が動きやすくなってきます。



日本の政治や経済に、そして、世界の平和に、春が来ることを期待したいところですが、なかなか春は来そうにありません。その元をたずねると、私たち一人一人が煩惱をたっぷり抱えているからです。このような私たちはどのような世の中を築いていけばよいのでしょうか。正義を振りかざすだけでは、解決しそうにありません。

お念佛申すということは、阿弥陀如来さまの智慧と慈悲を南無阿弥陀仏としていただくことです。ですから、地球のどこかに、苦しんでいる人がいる限り、私の幸ものだけを取り上げ、悪いと思うものを切り捨てるだけでは、心豊かな人生、平和な世の中にはならないように思います。

☆ はたらきづめにはたらいて下さる

仏さまの大きな願い

東井 義雄師 3月

もう、何年くらい前になるのでしょうか。毎日新聞社会部がまとめた『幸福ってなんだろう』（エール出版刊）という本が出版されました。その本の「はしがき」に書かれた文章を、私は今も忘れることができません。ご縁のある多くの皆さんにたびたびご紹介しているうちに、いつの間にか、私は、その文章を暗記してしまいました。ご紹介しましょう。

昨年十二月。私の最愛の人が四十八年の生涯を終って、永遠の眠りについた。乳ガン手術後の転移ガンである。その年の三月から脊椎が侵されて下半身がマヒし、大阪の自宅で寝たきりであった。医者は「あと半年のいのち」と宣告した。そのころ私は勤務地の福岡にいた。大阪と福岡。離ればなれのふたりは、毎晩、短い電話をかけあった。彼女の枕元の電話機が「夫婦の心」を知っていよう。彼女は、自分の病気が何であるかをうすうす悟っていた。

死 一カ月前。真夜中に電話をかけてきた。いつもの澄んだ声である。

「おきていらっしゃる？」「うん」「夜中に電話をかけてごめんなさい。私眠れなかったの」「痛むか」「痛むの。でも……」しばらく声のとぎれた。「私の一生は、ほんとう

に幸福な1生でしたワ」

泣いているようである。受話器を持つ私の手はふるえた。妻よ感謝すべきはこの私ではなかったか。二十三年間、ずいぶんと苦勞もかけたのに、彼女は私と子供たちのために、よくつくしてくれた。明るい家庭の太陽であったのに。という文章です。奥さんには、ご自分の病気が何であるかわかっていらっしゃるのです。末期癌の痛みの中で、いよいよ、自分の最期の日が近づいていることを、お感じになっているのです。

如束さまは、きっと奥さんのその絶望的なお心の中におはいりになって、絶望の淵から、奥さんを引き戻そうとなさって、光を放って、ご主人の大きな愛情に包まれて歩まれた、今までの人生の輝きを、お見せになったのでしょうか。今までの人生の輝きをご覧になると、奥さんは、その感動をひとり占めしておくことがおできにならず、真夜中、電話で、その感動をお伝えになったのでしょうか。それをご縁に、「妻よ、感謝すべきは、この私ではなかったか」と、この奥さんに支えられてきた人生の輝きに、感動のあまり、受話器をおもちになる手がふるえたのでしょうか。

このご夫妻が、仏法にご縁のある方であったかどうか、私にはわかりません。でも、そんなことにかかわりなく、如来さまは「一切衆生」のために、大きな願いをもって、はたらきつづけていてくださるのでしょう。



☆ 母の温かな笑顔を偲んで

物の乏しい時代に苦勞を乗り越え、一生懸命育ててくれた母でした。着物の仕立てを頼まれ、黙々と針を動かしていた姿を思い出します。子どもの頃の私のセーターや着物は、すべて母が作ってくれました。いま私が着付けの仕事をしているのは、母のおかげです。一人娘の私が、しつかり自立できるように導いてくれたのでしょう。



孫を可愛がり、遊びに来ると必ずうれしそうにお小遣いを渡していた母。ひ孫の誕生を何より喜んで、成長を楽しみにしておりました。いつも自分より家族や周りを気遣っていた、その愛情の深さをかみしめています。

母 早稲田ハルヨほ平成二十五年十二月五日、九十六年の生涯を閉じました。悲しみはつのがりますが、どんな時も手を差し伸べてくれた母を、心からの感謝を込めて見送ります。

「長い間、本当にありがとう…」 平成二十五年十二月七日

広島市安芸区中野東五丁目三十二番十三号 夏井 敬子

早稲田ハルヨ 釋尼妙應 25年12月5日 行年 97歳